

必ずまた奉納する 避難する前に 約束した



伝統が止まった7年間
ずっと悔しかった。



「人がいないところで奉納はできない。当たり前の話だけど、避難して7年も獅子舞を奉納できなかったことは、今でも悔しいし、これまで伝統を守ってきた先祖に対して、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだった」。

そう話すのは、山木屋三匹獅子舞保存会長の遠藤政見さんだ。今回の奉納には悩みもあつたと遠藤さんは続ける。

【掛け合い】
獅子同士の掛け合いも三匹獅子舞の見どころの一つ。息を合わせるため、奉納の一週間前、獅子役が集い、何度も何度も舞のタイミングを確認し合った



【師匠】
かつての踊り手を務めた師匠たちも、七年ぶりの奉納。篠笛の音色にこれまで奉納できなかった悔しさ、そして再び故郷に奉納できる喜びが込められた



「10月1日に獅子舞を奉納すると言った時、今、師匠をやつてゐたかつての教え子が、みんな二つ返事で答えてくれたことは本当にありがたかった。ただ、宿が廃止になってしまつて……。これまで守られてきた伝統が変わつてしまうということだから、これは悩んだ。神様はこんな中途半端なやり方で本当に喜んでくれるのか。考えれば考えるほど夜も眠れなかった。でも、神様に、避難指示が解除されたら必ず奉納します、奉納できなかった上組から奉納しますって約束して山木屋を出てきたんだ。今やらなかったら、いつ誰がどこでやるのか。今回、三匹獅子舞は絶対に奉納しないといけな

山木屋三匹獅子舞保存会長の遠藤政見さん。孫は笥を担当した和成さん



■ ■ ■ ■ ■
 今やらなかったら
 ■ ■ ■ ■ ■
 いつ誰がやるんだい。



【かかり舞】

獅子は3つの鳥居ごとに舞いながら石段を登る。これをかかり舞三つと呼ぶ。石段を登りきると拝殿が待ち構え、いよいよ奉納が始まる

【伝承】

獅子に関する道具の準備は、踊り手と師匠しか携わることができない。長い伝統はこうして守られてきた

【千本】

カラフルな「千本」は、地域住民が総出で作る。慣れた手つきだが、数百本を作るため、作業は丸一日かかる



獅子頭の重さは1kg以上
 激しい舞に備え、緒はきつく締められる



と思った。昔と全部同じってわけにはいかなかったけど、何とか獅子舞を奉納できたことは、本当に良かったと思うてる」。

遠藤さんは、山木屋地区、そして三匹獅子舞の未来について、「山木屋も獅子舞も、少しずついいから元の姿に戻ってほしいと心から願ってる。時代が変われば、もちろん変わっていいものもある。でも、獅子舞がこの山木屋ですつと継承されてきたのにはやっぱり理由がある。そう考えると、我々がこれから成すべきことは決まってる。三匹獅子はもちろん、守るべきものを守っていれば、必ず神様は見えてくれるから。次の世代に大切な宝をきちんと残していきたい」——。そう力強く語った。